



倭語文庫
五五

名

貳

47
其角兒書
句集
二

5
1139
47



5
1139
47

そと



九
祿
六
年
也

みづのよれより仲秋の月げ自ら
すつおのよれよりゆびおけへは
ハ深川の芭蕉店よりうらなむあは
あつ先一長ハ露店らのそら死ハコより
ひつりまふまふなりく歳ころのみ
めはたれこそあつて也はをむて
うけくくははははは船河野山
さあめくくはははははははははは

片らんもよとぬる句と集まらぬい
ほくを何となくと表さすこと
いひあふ秋の初らり老父ナマミの惱
つちやうとありしひめさすこと
一丸合代のおもひつらるる
せまうとく事なきお先づけ
なくとも(醫術)薬力とも
新のちとくこと

はせよあまひあさるる
いもよとれ醫王善遊セイのい
親旨のりけつり

其角
菰乃つねとゆくり具く薬外

とらふ句はらふと父のり
かきとらふと目とゆくり
くるは目とらふ不可思議の感意あり
一瀧テキのくみとらふ

けろぐ聊乃ちんあうくはほのこり
くろさあつふぶとさきもむる名残るまを
あまのりこりぬくはえけるく病又待期
のちろつまをえくもあかの情欲を成
ほの世れちうひをれを我息のかえん
所を厭離せよとあゆん切るあを
是受持法華の正眼をばく

其夜

其角

この社敷をまわくは七多羅樹

月下うやうや色乃ち東頃

と病よあふくともこのちんげ息の

かよんこちのよむる筆の好い

七十三歳の老醫うづう何の業を

よのせんやと杜る羨がうもむる所をも

求めん

死症ありあつこの病の驗もな

カレ 赤吹

かゝる世にたのむもあなれを死生在
命あるも移るもあゝ一は千金の
船しゝも一は舟も入てイッケツ海に
自入してこの世をまはして
朽又キウツのどちもすくすく親知帯
のあまのよのお酒酌のうらまの
良真のちかぬはあなれを老木
まはるるもあなれを花を親知

はあゝのせとせとせと板の松の森
とささるるもあなれを花を親知
あゝとちかぬはあなれを老木
具角
信濃のもをうまひありの月の
とあゝあゝけゝ病家をもうら
けりてゝ
東次
あゝとあゝとあゝとあゝとあゝと
あゝとあゝとあゝとあゝとあゝと
あゝとあゝとあゝとあゝとあゝと

百里^リ一^リ 杖^ツを^ツ褰^ツけ

十里^リ一^リ 杖^ツを^ツ褰^ツけ

五里^リ一^リ 杖^ツを^ツ褰^ツけ

去^キく^ク遊^ユを^ユた^タあ

を^ヲつ^ツく^クお^オた^タし^シ燕^{セン}寸

名^ナ月^{ツキ}の^ノ十^{ジュウ}歩^ポの^ノ錢^{セン}を^ヲ振^ヒる^ル架^カ

其^ニ角^{ツノ}

羽^ハを^ヲ羽^ハ織^{オリ}と^トが^ガの^ノ枝^エの^ノ音^ネ

仙^{セン}化^カ

龍^{リウ}の^ノ心^{シン}を^ヲ置^キる^ル斬^ツる^ル身^ミん^ンて

嵐^{ラン}雪^{セツ}

お^オれ^レと^トお^オり^リの^ノ帰^キる^ル杖^ツ杖^ツ

神^{カン}叔^{シユ}

お^オれ^レと^トお^オり^リの^ノ杖^ツ杖^ツ 江^エ東^{トウ}市^シ

介^ケ我^ガ

お^オれ^レと^トお^オり^リの^ノ杖^ツ杖^ツ 松^{マツ}風^{フウ}

桃^{トウ}鄰^{リン}

お^オれ^レと^トお^オり^リの^ノ杖^ツ杖^ツ 幸^{サイ}隣^{リン}

幸^{サイ}隣^{リン}

お^オれ^レと^トお^オり^リの^ノ杖^ツ杖^ツ 幸^{サイ}隣^{リン}

幸^{サイ}隣^{リン}

曉の紅をよめては白牡丹 介我
 金と費ツイエする 通る穿の戸 仙化
 人傳せし意はせしり也對馬沖 桂侯
 紅雲 掛る中后を依 弟叔
 大酒の流りし聲未練乳 介我
 鼻息よりちる元焼の灰 牙卷
 る松の心裁ひらつ貴モラヒなる 神叔
 おちし駒ニラミすり依 駒コマイヌ 素子

いづれも赤子の白ひかりん 其首
 路はあやもはも務質ク 介我
 棟梁の柱をわししニ 手砂
 料をよこしくよす宿跡 仙化
 ちまよふ心態のほろよふニラ 枕傍
 魚ニ ねねの章カラキ 肉桂 万巻
 ころころとすなまきく乳草枕 其角
 ちまよふ心態のほろよふ 手砂

双のまはらを何なる キホヒ 粉衣 素子

糸のたりのと月の花 地都

カケルシ 撥る下よぬ 他化

猪の母衣の射抜かりり 津敷

オ 骨よりくまの灯 平沙

只佛の衣を 育 福 其角

海よりと世の境 カク三 介我

海よりとく サカモリ 海まの 素子

羽衣の露を流く 月影を 万巻

老父の嘆を 他化

元年晋子孫の露と撥む予と平河と名つけ

ちめて此集子入と海ゆり守名と改むるの後

自集出ス事凡七度と又書を慕の志と

まゝこれと再板ス

此何事の舎人の如く新の露
片雲の鐘の音をきき露
待進一版のうらた露の如
琴風 百里 貞佐

二挺立ちし園よりへ飛ぶ 平砂
乞ひし津波の音をきき玉露 其角

右一巻の行をありしと尋ねて
可なりといふ形一難殊と云ふは夜に
あふす

朝零七日吟

人まよつるや一露の如く玉露
折し鳥の目もさか鹿心 蓮之
端の平子赤松山の白し 貞佐
碎はし物何處か長生 其角
多免くは買ては後ぬすふ業 作
研出印 玄関のりなり 若

小生此の若狭といふこと
 是ては乃明ぬ 伊勢の三郎
 とこのおきと配りぬる麻
 敷より縄より得て来ぬの
 鯨の目もとの尻尾もつけ
 既飽く手取おきは人
 宿におけ家り社結るま
 路おの牛一糸花のき山
 あり一と三と二月夜八月
 會中とと人方衆は此品
 若 佐 之 若 佐 之 若 佐 之

後悔も人よるれ小辰秋
 南柯那へは雨とと也
 乃てとるもや音京はと
 湯合へ浩け着おるに橋
 やるに珠粒を海へ入る橋
 子との喧嘩と分る先供
 篇とし 撫を兄へむむのり
 梅とや師をくや手相を板
 裁身よつと小袴 濠中地
 焼くをいふ 大佛 若 佐
 若 佐 之 若 佐 之 若 佐 之

安きくまは終るとんち指の紅
 臂を札乃下に心あや
 へ海毎の昔分月の夕る雲
 小山と指とさすけ掛物人
 足踏し四百六千一あらしに
 何利政埋く今お一宴宴
 就立も藤治と沈むむわら
 門流経る一練り一虫習
 毛うちとらとねい地書結地筆
 指はさすこれの筆おまゝる

若 佐 若 佐 若 佐 若 佐 若 佐
 之 之 之 之 之 之 之 之 之

光浮三粵見

けくまは日本の祀とる灯籠
 かーこくも穀と包芋の紫
 とんちもねまゆのすまひく
 秋乃車とハ沖の字若持
 人おんごりもまね月おさ
 是儀屋の石母腮のそまゝ

安士 貞佐 壺月 士 佐 月

木の橋と見せしむるまき 彦斗 士
 いっくら日さや堀い出拂少 佐
 引ッくらりもとと志北七舞えん 月
 さわらりハ陽ともあはれ小松中 士
 唐ん子香と見せり亭巨少り 作
 耕一作知の種とゆるさし 日
 南さくくハ髭頭目のまろる出 士
 迷子床く 母ハ生解 作
 菊の月も鳴は瓦下一 月
 豆腐ハ紅の 安太夫 扇 士

晴ハ斗ハ木木も止の屯鯉 作
 喜りくく見くらぬの橋 月
 病さく老々るどろ耳般川 全
 十系信土 豫 羊掛銭 作
 町表のじまくと立表のみ加減 士
 さよふかハ七分系の人お 月
 つねり神ハ留之のりみら数造 作
 千石海ハ管のさしけ 士
 立たれハあしきくろ鳥屋切 月
 嵐の藤乃 師 函さくた 作

宗蘇 夢の事と魁月の友士
 陸の明六の蓮の 元日 目
 金糸ねのありの手遊は無次才
 かりんは江戸の祝舞妓すく
 一二度ハ六君子のゆはあや便
 海り嘸と 橋ちりハ 氣
 高きハ目くくりくくハ何れ
 必のちじハ杖ハ 抱身 士
 麻くさりと草のちの資縁歌 目
 浮く休せおこりのおしハ 作

道出やハ中と案すハ夕河原 波星
 玉ナリハ孫と伏屋のハ海邊物 素丸
 出雲の 油ハひきえ 玉ナリ 知十
 中つりハ河のハやね 玉奈 故一
 せめそものをく 控ハ玉ナリ 以通
 せじきや石ハ 玉ハ 執馬 咬菜
 碧翠の 喜ハ 松ハ 玉ハ 沙竹
 玉柳や 玉ハ 玉ハ 錦水
 玉ハ 玉ハ 玉ハ 貫十
 玉ハ 玉ハ 玉ハ 拾翠

封切く妹とさるやうな月

鋤鱗

お旬のゆきか月も霜ん

右櫻

志しるも月子あそり一里塚

繪洲

名月やう作極のからり

梅子

名うやそも秋代のお路

歡興

月こそあそとろ七里或飛津

貞佐

満月の張きゆいとそりあ

栖鸞

星移り何の苦もあそと宵外

舞豹

風添

半夜燂

姉の子の麻時もさぬ月と青

李喬

おの吹とも秋新走う櫻

貞佐

赤合羽侵する蘭のほろん

長水

満とえんれと蹄こそげり

仙里

屋根雪のいさけ減り時鳥

素丸

何と石とさる川溪

歡興

橋次り一戻りふくおと海一白
 たもこ懐く意一しはる
 わっやまも定このめらるるもわ
 履ももるるの法信和の法
 かまもこの様も向り割袂に
 縛楢の手母系せく少人珠
 名物とどの身よすり土百姓
 翁と流るる達摩湯の月
 花あぐ後の世夢ハ割 膳
 葦の蔭乃のよけるる

貞信
 仙里
 李篤
 素丸
 貞信
 素丸
 仙里
 李篤
 素丸

島の介おりふ若いぶらり
 瓶折先へまこまぬく
 一艘、七両銀り行りけ
 竈かよし一室にけぬれむ
 海江口よまぶる経の持傳
 此と尼の矢折あふ^鴉ぶと
 晴やうし儀うづれは太蘆鉄
 三千本ハ比叡の煤舟
 燈心の申とふはと流ら切く
 公家の猪手ハ扇 浩りけ

貞信
 仙里
 李篤
 素丸
 貞信
 素丸
 仙里
 李篤
 素丸

夕霧の包丁くけも星じく入
 月ハ橋きハ的荷きつり
 葛のたふれ二井買せく路の河
 兄科の簪て羽子とわーり
 素更しの相子とと来^ル馬と宛
 上へくけりた谷の棟上^ク
 扱懲よ凡のりまの都浩
 三魚お^うも大^声と^中
 虚無僧の上座もむの幕^とれ^也
 行^笑の徳母の^けけ^は海^入

李翁
 仙里
 長房
 貞信
 素丸
 李翁
 仙里
 貞信
 素丸
 李翁
 仙里
 貞信
 素丸

巴く^ハ承親^連一^ハ七^五長^初
 去^岐對^馬何^れ海^帆の^月松^外
 名^月や^豆下^にけ^ハ海^栗
 繩^よ糸^りり^名月^と菊^階子
 月^や名^やと^みを^き琴^の候
 半^端の^秋と^うつ^まや^踏河^産
 月^みつ^と平^家の^一句^をる^か

居林
 識月
 長虹
 湛露
 青松
 也聽^{カッ}
 月下

其井
 里橋

ちんくふたつさのさすき
 籬耳子そくく藤やゆき敷
 習りゆきく何くすき敷
 織出十寸穂をみる座几立
 香中の涙と吹や海すま
 るさくろ十本七本と傳り那

控江
 尺竜
 其節
 古雅
 東和
 舟艦

笛の音の拍子おもやうく
 菘

扇風

古砌 響西風

豊屋主人

砦きあは主曉うさく
 咲人てふもさり末の舞
 道の亥の死下よしも新巻
 鳥屋がさるうし鷹の温良
 旅しわお燈りせの月と獨りて
 蒟蒻心じ 舟一乃大枝

如蒿
 貞佐
 貞丸
 子稻
 鳳翠
 夜霜

相〜手楽の雪の物ほけ
 一 面 美 や く し り も 者 音
 開 け り 親 類 出 合 契 子 分
 一 流 ぬ 恨 の 人 へ 吹
 お も そ も 忽 低 さ 汐 の 路
 泊 さ び し く 黄 瀬 魚 鳴 る
 い つ の 心 持 握 出 され る 親 世 音
 雲 へ 不 巧 母 菜 妻 一 や
 夕 暮 け 粧 と 見 屋 へ 窓 の 月
 下 され 屋 舗 船 へ 封 文
 山 夕 子 稿 風 琴 欠 竹 如 書 執 筆 立志 姬 奥 和 推

質 恵 と む 子 ず り 志 こそ 長 妻 へ
 喜 育 決 く 妻 人 母 とも 買
 雛 の 尾 乃 龜 山 の 尾 母 心 持 へ 指
 産 子 の 肩 へ 子 へ 休 ま せ
 囀 物 も 土 菜 男 へ 助 け け
 戲 言 け れ とも 尻 へ け け 評
 今 の 後 今 袂 子 海 馬 貝 の 玉
 と ね け 代 子 加 田 と 兄 へ 妻 へ
 瓢 箪 の 百 多 中 背 袴 の 一 忍
 米 二 俵 け れ け れ の 可 日
 立志 増 琴 欠 竹 如 書 執 筆 立志 姬 奥 和 推

掃り水に散 舊の子鳥の枝 始葉
 細路川 鶯 鶯や友子鳥 夕戸
 鶯のうらみ 鶯の末乃友子鳥 鶴史
 鶯のうらみ 鶯の末乃友子鳥 志下
 河 僻の道つ 鶯のうらみ 伴成
 了のうらみ 鶯の末乃友子鳥 巖堂
 淡路や 戸尻と押えか 初あより 荷十
 春鶯や 鶯のうらみ 鶯の末乃友子鳥 五舟

木枯

風よもよとつ 心ゆるの 麻起る 花夕
 こころや 金鋪へ 落す 何の聲 荷瑤
 木とつや 鶯の 鶯の 鶯の 泊舟
 風や 尾上の 鶯の 鶯の 雨畦
 去るや 心よ 目 盤の 声 北川
 こころや 鶯の 鶯の 鶯の 昭里
 風や 掃り 乾く 昆布の 塩 赤全
 己可 鶯の や 松と 啼く 鶯の 洪水
 葉の 鶯の や 鶯の 鶯の 鶯の 双舟

葉の

明もやねい茶のむ一ひ
 都頃はやし波越茶木恒
 茶のまのそなを柵の尾名と
 咳は実龍牙も滑く後む
 茶のむの吟や世と字信山金
 茶のまのそなを柵の尾名と
 大茶や茶のまのそなの人
 其断
 三花
 沾幹
 李冠
 而又
 怒潮
 即電

茶南方嘉木

山景むの兄と花の松乃鶴
 耳一もよあはけ菜ひさ
 銀澄虹より路子名録り
 月まの畳の影ハ茶と
 深よとや海屋子松乃豆田
 足下とくくう角カ丸子
 咫尺
 貞佐
 全
 咫尺
 全
 次佐

布衣子思の袷よかられたる
 判りのつとろ子系法う過子
 求らるる去用強う痛入
 の費ハ鳥 さまめ 洞
 やま寺の音摘産をまらぬ
 ともへの年三にもやあらん
 挑灯く穴法出地もく麻う
 昔のつと猫の舟く鳴月
 めくくもききりゆかほの貝
 洗ひ法衣うあ本屏
 貞佐 貞天 貞佐 貞天 貞佐 貞天 貞佐 貞天

祇写とと、いひきふの次局
 いはりあはるはきじとと
 中出家のいひきこがやつし
 鞠躬如くるとむの候あ
 海軍かぶらうんのおる店
 くらり羽こきりのね洗淨
 馬の買つてもやれりす糖の帯
 京のまけんキ 津いさき
 半橋の糸く官毒じ焼りそや
 是もく船の口母鬼灯
 貞佐 貞天 貞佐 貞天 貞佐 貞天 貞佐 貞天

雷

大雪やあはれ中切趣——
 山伏の心持く出拂い松乃ゆき
 初音や園法入道百日め
 至世の師の垢つはる音忌——
 飲せし口の待とせしり音の馬
 更ハ決しや音の茶友逢
 新化や音の集わり海老多
 音のむいしと音乃小きうき
 躰葉 文東 秀峨 音雨 伸影 之雪 礎夕 滴之 練糸

勘めとあはれりり終や音の久
 志留——音さすり音一が音涼し
 日くける横の中ら音凡非
 梅多と音乃細——音の流
 獨り音の庭の媚と音の物
 海音や音の海の音の音
 木中音の音の音の音
 彌余の音の音の音の音
 左右 山梁 蝶石 非琴 江左 志推 以鳴 免牧 舞鞆 身作

音よ名のしこ漏ね手柄る 密雨
 初ゆきの初い時と若く月夜る 沾耕
 哉希い集落と作れ音の門 撰居
 毎音い出雲くしり比叡の音 阮志
 孰算の約こと出れ初門音 詞玉
 音海やししし 都若西明 和推

山川無

古今

壽鶴堂

音しも及んく音若志成子 松春
 音のつたをふたぬ小舎 貞佐
 天下の廐の袖と極メく 風葉
 かいえに舟のりも襪子 可圭
 夕月乃こけ始ては若若く 東雲
 麻く若若く 鳴子 長水

重てるく下はこゝろのきり橋 沾洲
 くちふとくして橋乃薦海 松春
 敵けとも運や出口の也福 貞信
 枝はく海の舟の名はく 於紫
 重しと内よ寸の難はく 重
 古跡も指く私直乃信山 赤
 桃灯も借らぬも信直の香 長
 心はく是の蓋と打蓋表 沾洲
 柱はくおの清き書はく暖カニ 紫
 妙と信りく家取と見子 重

+

三月の氣も時梅と旅衣 於紫
 踏欠く山一 孤釣種 貞信
 橋乃乃新子路はくも清海 重
 うつゆく橋はく狂言の海 紅
 留る新のぬはく世と跨越 赤
 くづ草もく次悟章振 於紫
 膝病子妹の立居のぬけ衣紋 沾洲
 お茶も婦はく信欠落うね 長
 ち屋招て廿六杯はく誰い月 貞信
 おさめはくお後の新 赤

豊后の羽織もうけはけの心
 同 一 舟 するの 入 鹿 させ
 かはつても比土居の床をり
 戸とこらまの守 高と端 岩
 舟の乃ちい切灯 清くこも
 玉鶴と先へすじ 土作の鶴
 一雲の充えきつ けきおろし 湫
 舟はか増 破れ役てもが
 華いさも暖 着子薄て上り 右刀
 音くくろり 舒口 中 管 中
 執等

月尾玉約

いらひまぬ十七み字のらり立
 接穂に 紙をまて 紙 お漬
 いあしらひ 印 堀 施ら まりて
 京くく けり 橋の 筆
 合ぬるあふぬ 目 小あらし 傑
 を志よめて 身 裁か 子 軽心の 礼
 千一 晴の 月 見ぬ 枝より と 法
 得きく 金一 一るよ 若の 繁
 貞伊 沾洲 青峨 蓮之 安士 壺月 月下 柯木

龍接子、龍馬帽子、かゝる毒
 雷、蛇おとし虫、蛇
 起さうし、あまのきく、茄子、さ
 く、海金、時、足、毒、す
 何れ、お、佐、久、百、の、流、し、子、と、悔
 五、つ、う、う、く、ふ、子、や、さ、の、あ、び
 庭、の、木、れ、つ、う、ぬ、子、お、ん、ま、じ
 室、町、廻、り、さ、ん、船、と、な、月
 物、賣、り、新、山、伏、と、ん、て、と、れ
 早、河、の、関、ハ、古、久、寸、ら
 風、葉
 倫、里
 巴、中
 朝、梢
 古、井
 晋、如
 文、東
 密、雨
 咫、天

日和、知、の、格、ら、面、士、乃、額、際
 朽、木、く、く、の、し、い、や、し、妙
 酢、ハ、何、と、第、七、部、持、子、を、像
 蘇、何、く、き、す、裕、出、茶
 害、の、茂、と、く、く、は、夕、へ、し、
 う、き、世、の、所、け、ハ、裁、身、ま、る
 雇、ハ、お、お、ま、の、お、い、神、も、ほ
 言、お、弁、の、お、い、て、と、武、士
 廬、崎、の、し、お、お、序、崎、暗、着、け
 や、ま、り、や、ら、こ、の、ま、ら、あ、お、が
 秀、峨
 名、東
 比、海
 只、人
 焉、如
 古、井
 壺、月
 巴、中
 也、怒
 言、端

此のちさや子持てら抱て見や
 垢裏坊はるめ 編くよあ
 摩毒いの中と沛艾刻くい
 者礼おれ 多原 歌さし
 所買代儂子のよとああし
 三指すとはは六韜と出る
 戸付の灯は波とまじの後の月
 角力もこの名産の法
 月しき菜といはれし祥りに
 借りてとあく 新うは道の外
 吉井 巴中 喜徳 善之 久東 目下 秀晴 安土 月下 秀晴 吉井

ミラ

白みへ後、灯んも小競
 崎とさけ新門前は祀
 東平の船りうのうは族法
 一の付、ま、海 ぶる寸
 立ともや扇さるる小忌衣
 阿蒙海道とともりらん新
 向いても大悲の才の海苔のあ
 まの食と 餅けむの編笠
 湯へ みる尻目あしては子屋煮
 助も出さる 揚町の青
 吉井 巴中 喜徳 善之 久東 目下 秀晴 安土 月下 秀晴 吉井

一日お歩流を橋より西の月 巴中
 入江ぬれ池心より 子陸 雲如
 曹山一存此外より下掛 出天
 たも人は崇光より切乃玉 冬景
 盤のあり神は信吉 祇園 辰 作海
 口吸りへくも 間短一 只天
 古恋はる月、響きのわくわく 巴中
 揃心と唱へ歌わいお郎 右村
 鳥の啼小を 粥くし鳴し 蓮之
 百夜 換まら 孫陸院の 船 舟系

月よりふりと布子に愛を 嘆息白 舟若
 夢哉と云ふ為の 洒手 杖の意 穴作
 年々此粟子 殊極 難く 壺月
 月の靡乃 強有る 舟子 蓮之
 雪の洲と 鰐 蓮舟子 呼起し 出海
 草鞋 若石も 之海 若き 池
 力じとつる 雲物 斗 明ら 舟若
 小判と やらハ 結句 無功 蓮
 組伏す 海火と 何 蓮舟 冬景
 と 骨も 互 吐く 世 舟若

待らんとも多も師を新にやあ 月下
 音塵とよまぬ法もあれ 毒
 禪子願ひの悔し 欠佳
 中ニ舟板 云條 云條 晋如
 やねふたに自らえぬ秋のほだ 秀隠
 十指折くく ありのうたに秋 安士
 架古の月ト戸に抱えをり 久東
 七中ころた人そん藤おたり 巴中
 貝吹く國の毒母の花六時 毒目
 まやもころり 狗脊の綿 月下

五つーやちとめちの決下旬 蓮
 約束は日一 能は信毒 旧海
 鼻、後、丁子とよむはゆふ 古井
 下根とるくはよ敷海ぞや 六戸
 坂中の糞守也、法も編 毒隠
 陰い雪りー 陰い茶の毛 毒隠
 向子病室のかり約し 安士
 翹りの教り 翹けり 毒目
 奥くは月も牛屋の毒屋 耳若
 麻毛 禪子ぬ玉子り那 欠佳

おさう月と油の事落く殖 番如
 市より侍 密に縁子 吉酒
 研き満す麻布境の事相極 巴津
 稲荷まふ行憲と鴨 栗割 地系
 引ひとあもきわ、信もき片 注海
 顧られは糠漬く 海 安士
 香飯とあま 梧子の大いさ急をい 吉酒
 女を摸へ 一のこま急のて 吉酒
 本舟より浪をいぬる事あり 吉酒
 時直らぬかき 船少 櫓 貞任

浮れとそと初と奥籃花序 只人
 毛糸より糸子 極態も有 概等

晉子去而遊必十有七年于
此負笈而遊門者桑二畔之一也也
身子今不忘七尺去之敬誌志為
恩此集已集吳子掌聞其名而贊
曰者主柱別是知吾工者其久別
益為家於以之為跋
享保八年之夏

豐屋主人題



殿工

大久保一富

